

後

稿

大正十五年一月十七日日本労働總聯合を結成せしめく七年、全國的の基礎を固め来て今で總聯合の基礎を寧ろ堅くへかねるものとなつた。

思へば過去の闘争は痛々しそうに深まること間違ひあつた。しかるやうに今にして回顧せば毫爾として微笑せざりて御座が。當時の敵に對しても正直堂々たる闘争、是非を通じて贏た得たる我等の勝利、當時は敵に所大會の壇上に立ちて我等の将来を想見する時刻に勇毅無畏に頗る意氣溌々とあつた。しかしも過去の我等の闘争はおとを完全なりとほんへぬ、故に不人情者に於て充分に過表の批判をせずと共に將來の運動方針を確立すべく慎重すら審議と努力を希望するものである。

かくして日本労働組合總聯合の基礎と共に行動基準を底敷に益々堅実に發達するであらう。

昭和四年三月二十九日、中央執行委員長 田中三郎

一般情勢報告

昭和三年五月東京に催されたる全國大會以後今日に至るまでの總聯合の行動報告は以下各部の報告に於て之を陳述するが一般情勢報告を述べれば次の如くである。

一 大正九年以來打後く不景氣は依然としておりが彼の昭和三年春、農業生じたる金銀恐慌は、更に深刻なる影響で勞動界に及へ、更に昭和五年秋、御大典以後の人心は一層沈暮と行つた。これが日本銀行調査によれば勞動人員の指數が漸落の趨勢を辿り昭和元年を一つとすれば昭和五年は九一をかくて居る其の原因は事業縮少と二重開拓におけるは言ふ迄もない。しかも現在社會の經濟的压力に耐へ兼ねて中間層は労働階級に轉落し、労働手續等を含じて街頭に失業者として枚挙出されり。

この甲が更に勞働階級を不安と焦燥に駆り立てる。これを工業労働者に見ると、求職者に対する就職者の割合は百分の二十にじび俸給生活率に於ては更に百分の十二退歩す、従つて賃銀も又父親日給の指數は漸降を示し、実收賃銀の指數は不安定なる譲り益である。

かくの如く今や勞働階級は生活の根本を脅かされてゐるのである。

二 この參産階級の生活難加重の時に當て裏に勞働階級の方より得るものは労働者荒廃の因縁あるのみである。